であり今回本州から初めて知られた訳である。これを見ると千嶋南部、北海道、本州、朝鮮に於て総て9月中旬に獲られて居り、恐らく Kolyma, Anadyr 等に蕃殖するものが定期的に南下し来るものと考えられる。但し Buturlin は本種が Kolyma 河口に多数蕃殖する事を報じているが、恐らく本種の蕃殖地は局限的で総体的に個体数が少く且、山階博士の御説の如く(「鳥」VII, (31), pp. 72—73) 8, 9月の獵期前に渡来する爲、採集される機会が殆んど無かつたのであろう。

終りに山階鳥類研究所の標本を調査させて戴いた事及び獵政調査課の三嶋冬嗣氏に御手数をご煩はした事に対し感謝の意を表する。

Résumé

The author collected two specimens of each of the above rare Japanese waders at Tsujido, Kanagawa Prefecture, Honshu, during the autumn, 1949.

Brief descriptions of these specimens are given, with a summary of the species' known habits, distributions, migrations, and other recent records. He considers both species to be rare though regular migrants in Japan rather than stragglers. These are the first specimen records of *Calidris melanotos* for Honshu.

ノ ト ー ニ ス の 雛

Note on the chick of *Notornis*

蜂 須 賀 正 氏

Masauji Hachisuka

ニュージーランドの珍鳥ノトーニスが1948年に再発見¹⁾されてから日本に達した欧米の出版物にはくわしい説明が少しものつていない。ところが進駐軍の新聞“Bcon”の1949年9月30日には雛の大写しと親鳥の棲息状態が出ているので本誌に転載して学者の注意を惹き度いと思う。雛の大体の大きさは之を持つている手と比較して分るのであつて約二週間のものである。羽色は眞

黒で大きな足は桃色を帯びた褐色 (purplish brown) でありまた短い嘴は黒いが先端丈が白色であるさうである。

英国の *Aviculture magazine* Vol. 55, No.4, 1949, p. 139 に発表されたロンドンに於けるニュージーランド政府情報部の報告に依るとノトーニスは非常に神経質な鳥で、テアナウ湖のコロニーは約 100 羽の個体より成り 10 より 20 の蕃殖するペアがいて一腹に一卵、一羽の雛を育てている。このコロニーは次第に大きくなつて行く様には思われないのでノトーニスは繁殖して行きつつあるものと考えられないさうである。卵の色彩はクリーム色の地色に大きな淡い赤紫色の斑点 (faint mauve blotches) があり其の上一面に褐色斑点 (brown spots) が散在している。以上の記述はバンやセイケイの卵と非常に良く似ているものと言はねばなるまい。

クイナ科鳥類の中雛の黒色のものは幾属かが知られているので、成鳥の黒色のものは皆雛が黒色である。例えばオホバン *Fulica*, バン *Gallinula* 及びヒメクヒナ属 *Porzana* の中にも *P. tabuensis* 其他がこの例に当てはまる。ノトーニスに最も近いセイケイ *Porphyrio* の雛も同様に黒色であつて足の色はよごれた赤色 (dull red) であるから之もノトーニスと同様であるが、嘴の色丈は黒の変りに黄色がかつた象牙色の黄 (yellowish ivory) である。セイケイ属には 3, 4 種類が含まれているが之等の色彩は皆紫と草色が主であつて大した変りは無。皆旧世界の温帯と熱帯に広く分布してて同一地方には一種ある丈であるから見様に依つてはセイケイ属は monotypic であるとみなす事も出来るのである。所で西太平洋に分布するものは南へ行く程サイズが大きくなつる。²⁾そして足が長く体は重く飛ぶ事は非常に下手で、普通は飛ぶ事はしない。この特徴を最も良く表わしているのが *P. poliocephalus melanotus* で産地はノトーニスと同様ニュージーランドなのである。このニュージーランドセイケイとノトーニスは幼鳥も成鳥も色彩が非常に似ているが、ノトーニスは足がもつと強大で竜骨突起が無いから飛ぶ事の出来ない鳥類の特徴を完全に備えているのである。即ちニュージーランドセイケイの特徴を極端に發揮しているのである。

ニュージーランドは非常に古い時代オーストラリヤから分れて独立した島であつて鳥の種類が非常に少ないのが特徴であるのかかわらず、セイケイは世界の他地方に見受けられない現象である所の 2 種が共存しているのであるそして不思議にも兩者とも飛ぶ必要がなくてよい生活をしているのであつて

ニージーランドの Te Anau 湖畔に於けるノトローニスの成鳥 (右)
と孵化後2週間目位の雛。

之に好都合な適応性を備えているのであるが、ノトーニスの方がニュージーランドセイケイより一步前進し完全な変化を遂げている。後者の方はこの階梯にあるものと見られる。ニュージーランドの鳥類の中には飛ぶ事の出来ない鳥類が多いから以上に述べた特徴は地方的のものである。

此の2種の鳥は進化を論ずる上に於て非常に面白い材料を提供している。即ち兩者は同一祖先から出発したものである事を認めるがラマルクの「用不用」の説に依つて分化したと云う説明は此の場合適用しない。何故かと云うと同一祖先から出発して同一方向に向つて発達して行くものが同じ土地に於て2種(又は2属)に分化するとは考えられない。それで突然変異 *mutation* の説をもつてする場合には満足な解決が得られる。然し之にはその時の状態の考察が必要である。ニュージーランドセイケイは同種のものが他の土地にもいるからノトーニスからこのセイケイが出来たとはどうも考えられない。けれども同時にノトーニスは古い鳥であると考えられるからニュージーランドセイケイから出発したとも想像し難い。それで最も肯定し易い説明は次の様である。

ニュージーランドがオーストラリアから分割されて島となつた時にノトーニスの祖先はすでにニュージーランドに存在していた。そしてこの島嶼の特徴ある発達を遂げ出したが完全に今日の形となつた後ニュージーランドセイケイの祖先が渡つて来た(多分オーストラリアから飛んで来たもので、此の地には近似亜種が存在している)。そして同一方向に進化し始めたがノトーニス種の長い月日が立つておらないので今日の程度で止まつている。此の考え方を「再侵入」(*double invasions*)と云い極く新らしい学説である。

我々の手近な所で他に例を求めるならば、それは琉球と小笠原の小さな島に2種のカラスバトが棲んでいる事である。其の大型のエンデミック種の方はそれぞれ絶滅したが、小型の日本にもいる種類の方は未だに栄えている現象の起因も再度侵入説で説明すると十分納得づく事が出来ると思う。この大型のカラスバトは始めから数が少なく、現在は既に絶滅して仕舞つた。ノトーニスも之とほぼ同様の状態である。それで個体に一定の寿命がある様に種 (*species*) にも何れは終りの来る寿命があるものと考えられる。それで以上の珍らしい鳥類は個体は健康であつても生殖力が次第におとろえて来て遂に古い型の種は消え去らなければならない。

個体発生が系統発生 of 縮図であると様成長した個体 (*adult individual*)

の一生は種の生立ちの縮図と見る事が出来よう。

- 1) ノトーニスの歴史及び再発見の経路は「野鳥」5月号に私の書いた「世界一の珍しい鳥」を参照あり度い。
- 2) ツカツクリ、バンケン等にも此の特徴が見受けられる。

Résumé

A rare photograph of two weeks old *Notornis* of New Zealand is reproduced from a newspaper. *Notornis* is closely related to *Porphyrio* and New Zealand has *P. poliocephalus melanotus* which underwent the same type of evolution as *Notornis*, only not to that extreme degree. The origin of these two related birds is explained through the theory of double invasions. The author believes that species has a termination to its long continued life and *Notornis* is considered to be a waning species. Like ontogeny is a short repetition of phylogeny, a life of an adult individual is considered as a concise picture of a species it belongs and which one day must reach the end of its specific life.

伊豆大島・三宅島より新記録の 鳥類について

On newly recorded bird from Oshima and Miyake,
the Seven Islands of Izu

中村 幸雄・中 村 司

Yukio Nakamura & Tsukasa Nakamura

筆者等は1951年3月2日より13日迄、伊豆大島・三宅・八丈の三島の鳥を採集調査する機会を得て、17科53種及び亜種を観察し、11科19種及び亜種、80点の採集を行つた。其中三宅島より new specimen record 3種及び大島、三宅島より new sight record 合せて4種があつたので次に報告する事とする。New record か否かの判定は主として山階博士の伊豆七島の鳥類(「鳥」vol. 11, pp. 191—270, 1942)を参考とした。なお new record